

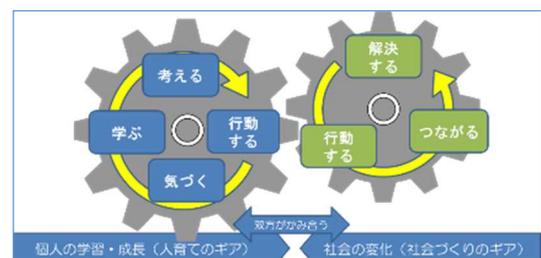
第四次滋賀県環境学習推進計画（案）に対する主な意見 <概要>

8月18日（火）滋賀県環境学習等推進協議会（第1回）

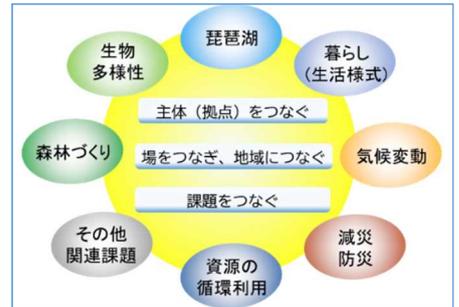
- ・ P.4 36 行目 平成 30 年に環境教育等促進法基本方針の変更があり、ポイントとして、体験活動の捉え直しが行われた。自然体験に加え、社会体験、生活体験などにより、環境社会経済の統合に資するような資質を育む体験活動の推進が幅広く期待されている。
- ・ P.8 の基本目標に「いのち」というキーワードがあるので、「いのち」を守るという部分とつなげるのはありだと思う。環境省の地域循環共生圏の考え方は気候変動だけに対応したものではないので、P.8 の 36 行目の「気候変動に対応した」の文言は必要ないと思う。
- ・ P.13 の学校等の所にコミュニティ・スクールのことを書いてもよいと思った。
- ・ P.13 のコラムで、守山市守山中学校の取組が展開されていくことによって、子どもたちがこの後どうなったのか、を書いていければよいと思う。
- ・ P.18 の「場や機会づくり」で、「自然を活用した幼児教育・・・」の文言はよいが、幼児教育や保育に関係していない一般的な広い意味での自然を活用した活動の情報提供が消えてしまっている気がする。広い意味でのそうした活動の情報を積極的に発信してほしい。
- ・ P.5 の原体験として自然に触れた経験が少ない先生という部分が非常に大切でネックとなっている。そこで、コミュニティ・スクールが中心となって、先生方と一緒に郷土や自然学習をどう進めていくのか、フィールドワークなどを通じてプログラムを考えていった。コミュニティ・スクールの制度を活用しながら、まずは先生方に興味を持ってもらい、子どもたちへと広げていってほしい。
- ・ 先生方に川に入ってもらおうのは大変だが、一度経験してもらおうと生き物がいて、感動が生まれる。関心のない方に自然体験の面白さを知ってもらうことがネックである。それができないと子どもを連れていけない。最初の一步のための場づくりは行政の支援が必要と思う。
- ・ 学習をする前に先生との打ち合わせや現場を見てもらうなどして、先生に理解してもらうよう取り組んできたが、地域学校協働活動推進員のようなつなぎ役がいると、団体としてもありがたい。

9月1日（火）滋賀県環境企画部会（第1回）

- ・ ギアモデルのステップのうち、教育の観点から「学ぶ」「考える」は似ているので、一つにまとめることができるのではないか。考えた結果をアウトプットするという意味では「伝える」ということがあるのではないか。
- ・ 「学ぶ」というのはインプットであり、「考える」はインプットしたものを自分で咀嚼して考えるということ。「知る」・「学ぶ」ということと、「考える」は別物であり、ステップが違う。
- ・ ギアモデルは現実の側面のどこかを強調するもので、ギアモデルが環境学習の全ての姿を表しているわけではない。現状の環境学習推進計画では、学びを行動につなげていくということに重点を置いているようなので、これでいいのかなと思われる。



- 重点課題をつなぐ学習の推進のイメージ（右図）について、少なくとも5つの重点課題を明確に盛り込んでおかないと、イメージに相違が出てしまうのではないかと、イメージを見れば少し出てきているため、これらが入っていることはよいと思う。
- 暮らし（生活様式）が一つの課題に入っているが、環境学習を通して暮らしや生活様式、行動を変えていくことがベースなので、課題の一つとよりはベースの部分。



10月16日（金）滋賀県環境学習等推進協議会（第2回）

- P.4 25～29 行目「国の動き」の地域循環共生圏に関連した記述について、持続可能な地域づくりを地域の人たちが中心となってやっというニュアンスにしてはどうか。
- P.5 3 行目「滋賀県の動き」の琵琶湖保全再生計画に関連した記述で、固有種や水草などレッドリストに属するものを守るというニュアンスを入れてはどうか。
- P.6 3 行目 学習時間の確保が課題という中で地域学習の重要性が述べられているが、地域学習の重要性は時間がないからだけではないので、もう少し文言を充実させるべきではないか。
- 「地域学習」は学校教育だけでなく公民館、まちづくりセンター等社会教育でも取り組まれていることから、「学校教育だけでなく社会教育でも取り組まれている『地域学習』」としてはどうか。
- 学校だけに任せるのではなく、地域全体で地域のための人材を育てる、そのために地域が学校と連携して、教育に協力していくという枠組みで進もうとしている。
- P.8 31 行目の「多様ないのちのつながり」について、未来のために考えるということが重要なので、未来に向けてのいのちのつながりといったニュアンスにした方がよい。
- P.10 の人育てのギアモデルの4つのステップに関して、環境学習では、気づき、考え、行動すると言われる。「気づく」「考える」「行動する」のどの段階も「学ぶ」なので、ステップに「学ぶ」は本当に必要なかと思っている。
- ギアモデルの核にある「近江の心」は知識や技能だけでなく環境学習の大事な部分と思う。人と人のつながりを考えると、人を大事にする、他者を思いやる心が大事であって、地域に愛着がある人が行う、という話ではないかと思っている。
- 幼児期は教え込むのではなく、体験を通じて学ぶ時期と言われる。幼児期では「気づく」は上位目標であり、「感じる」や「関心をもつ」ことからのスタートと思う。
- P.15 求められる活動の例1つめの●に「琵琶湖をはじめとする滋賀の豊かな自然とあるが、森・川・里・湖を入れたらどうか。
- P.15 求められる活動の例5つめの●に関して、市町の環境政策は差がある。協力・連携の前に「情報交換」を入れてはどうか。
- P.16 県の施策体系として6つあるが、7番目に成果を内外に発信する、を入れてどうか。
- P.31 の図3に記載されている「環境保全行動実施率」に関して、異なる二つの調査を行っている、というところは少し強調しておいた方がよい。